

精神病理学における人間学派

本林 良章

人間学的精神病理学(以下、人間学派とも表記)は、哲学・心理学・精神医学の交差点に位置する極めて学際的な学問でありながら、昨今の状況を顧みるに、これらいずれの学問分野においてもマイナーな潮流となっている。この危機に際して、今一度、この学それ自体についてやや断想に近いかたちで記したい。

間主観的根拠

今日の間主観的精神病理学が、多かれ少なかれ L.ビンズワングの提唱した現存在分析の系譜に属するものであることは確かであろう。彼は、S.フロイトの精神分析と M.ハイデガーや E.フッサールの哲学的現象学に依拠しながら現存在分析を創始した。霜山(2001)が言うように、現存在分析は、それ自体は治療技法ではないものの、治療者が患者に「出会う」という精神医学の基礎的事象に主眼を置く。患者の生きる世界への肉迫に際して、哲学的現象学が方法論的に援用される。人間学的精神病理学を貫徹する視点を取り出すことに関心がある本稿にとって重要になるのは、ビンズワングの「世界超越存在」という概念である。彼がハイデガーの世界内存在に対してこの世界超越存在を提出するに至った経緯を、木村(2008)は次のように記述する。すなわちビンズワングはハイデガーの世界内存在の「世界」を個別世界として強く受け取り、共同世界への自他の共なる超越を含意する世界超越存在を提出するに至った、と(205-6 頁)。

本稿が差しあたり主張したいことは、まさにこの自他の共同性への着眼こそが、さまざまな人間学的精神病理学を貫く一つの視座ではないかということである。しかし、これは何もオリジナルの主張ではなく、加藤(2001)は『霜山徳爾著作集』第 3 巻に寄せた解説にて次のように簡潔に言う。「……広義の人間学

的立場の出発点[に]は、人はいつもすでに他者と共にあり、他者と側面的に交流し、いつもすでに世界と交流している、という前述語的かつ前反省的な、自己と他者、また自己と世界との内的絆が備わっているという認識がある。重要なことは、人間はいつもすでに、一個の身体をもって他者および世界へと開かれ、同じ事物、事柄を分かちもつという人間の相互主体性、ないし共同性への注目である」(257頁; []は本林)。

人間学的精神病理学者である木村敏は、この共同性という視座から統合失調症の病理に取り組み、「あいだ」という固有のアイデアを提出し練り上げた¹⁾。木村のいう「あいだ」は単なる経験的共同性として解釈されるわけではなく、むしろそれはわれわれの経験を下支えする間主観的根拠という謂いである。さらにこの間主観的根拠それ自体が「あいだ」として解釈されるというよりは、各人とこの間主観的根拠とのあいだの関係こそが「あいだ」と呼ばれる。ここから導かれるのは、各人がこの間主観的根拠との関係を適切に築き得ないことそれ自体が、すなわち統合失調症の本態に他ならないとする見解である。

V.v.ヴァイツゼッカーの生命論や西田幾多郎の哲学を独自の仕方でも取りながら、木村(2014)はこの間主観的根拠に、個別的生命がそこから生まれそこへ死んでいくところの匿名的生命それ自体を重ねる——木村はしばしばこの匿名的生命を大文字の〈生命〉と呼ぶ。さらに木村はこの非人称的生命は死でもあるというテーゼを次のように言い表す。「考えてみると大文字の〈生命〉は、個々の生命体がそこから生まれてきて、そこへ向かって死んでいく、個体的生命の源泉でもあり行き先でもあるような、ある種の場所のようなものだといえる。その意味では、それは〈生〉であるよりもむしろ——やはり大文字の——〈死〉であるということもできる」(木村 2014, 83頁)。なお精神的な捉え方においては、ある種の内面化された養育者が、われわれの経験的な生を支える根拠に相当するのではないだろうか。その意味で、根拠への決定的着眼は必ずしも人間学派に限定されるものではないと言える。

ただし付言すると、人間学派における間主観的根拠は、経験的な概念でもなく超越論的な概念でもない点で他の学派から際立っている。この点を確認する。何らかの超越論的な構造ないし機能が病者において破綻しているという——しばしば精神病理学の論文で見られる、そして私自身も博士論文において行って

しまった——主張はたしかに背理である。松尾や谷が指摘するように、超越論的でアプリアリな構造や機能(ないし、経験の可能性の条件)が、アポステリアリな病という経験によって損なわれるということは、その定義からしてあり得ないからである(松尾 1997, 13 頁; 谷 2015, 214 頁)。また、総田(2003)は哲学から概念を借りて、その「欠如」として病者を考えるという精神病理学の方法論的な問題点を指摘し、(1)その概念が由来する哲学とそぐわない点、(2)臨床経験とそぐわない点、(3)この種の論法では際限なく反証不能な議論を生み出すばかりである点を批判している(8 頁)。それでは精神病理学にとって致命的なこの問題を、どう考えればよいのだろうか。こうした精神病理学の方法論的な矛盾を視野に入れた上で、谷は、精神病こそが経験的／超越論的という区別を問い直し、まさに両者の「あいだ」を切り開き得るのではないかという見解を提出している(215 頁)。すなわち、精神病は経験的次元と超越論的次元のあいだで生じている危機である、ということになる。翻って、木村が「あいだ」と呼ぶところの、相互主体性・共同性・間主観的根拠は経験的次元と超越論的次元の「あいだ」に位置するのであり、この点を徹底して掘り下げることが肝要である²。

言語

以上のように性格づけた人間学派ではあるが、精神科学における現代の潮流を踏まえた上で考察すべき点があるように思われる。例えば今、臨床心理学や精神医学においては心理検査や診断の信頼性が第一に求められる。

しかし、木村(2005b)の言う様に、例えば心理検査における患者の言語的反応は、誰に検査が実施されるのかによって影響を受ける(137-8 頁)。心理学という精神科学においては、科学的な客観性・普遍性(それは再現可能性、エビデンスなどと呼ばれる)を尊重しながらも、それとは異質の何らかの客観普遍性が探求されるべきではないだろうか。

私は博士論文にて現象学的臨床心理学者 E.ジェンドリンの一論文を参照しながら、人間学的/現象学的アプローチは、経験の内容ではなく経験の様式における普遍性を求めると論じた(本林 2014, 第一章)。この点は、ビンズワンガー(1995)の「人間学的均衡」を例にとると分かりやすい。これによると、我々は

「広さ」という世界的経験の地平と「高さ」という理想願望的な境地のあいだを生きており、この均衡の崩れこそが精神病者の経験様式である。すなわち、広さという地平を顧みることなき理想の境地への飛翔がフェアシュティージェンハイト *Verstiegenheit* である。「人間学的均衡」は、当人が「何を」経験しているのかという経験内容ではなく、「いかに」生きているのかという経験様式を語る。あらゆる人間はこの均衡・不均衡を生きるという経験様式をもっており、その意味でこれは普遍的である。しかし、博士論文では結局のところ、精神病理学がいかにして個別の症例を参照しながら何らかの普遍的な主張を生み出し得るのか、という問いには答えられなかった。

この問いを考える上で次の点を取り上げる。人間学派の行論はしばしば言語の実践的使用に裏打ちされており、それは例えば科学的普遍性とは別種の、何らかの、真実性を帯びているという点である。ただし一見して、それがいわゆるエチモロジ的な言葉遊びの印象を与え得るのもまた事実である。霜山(2001)は言う。「現存在分析に対する多くの誤解の内に、それがあまりに哲学的だと批判する誤解と対蹠的に、それがあまりに日常の卑近な慣用語や擬容語や比喻を使うという非難があるのは興味深い。現存在分析は、人間がもっとも直接的、根源的にその世界を示す『生きられた』気分の体験を現わすのに使った比喻を重要視するのである」(77頁)。続けて、彼は「彼はIQが一四〇である」という合理的表現と「彼は目から鼻へ抜けるようだ」という比喻を比し、後者もまた「性格のニュアンスをふくめた知的水準の表現として、当該の人物の把握に役立つことが多いのである」としている(80頁)。

人間学派が言語へ関心を払う背景には、我々の生が徹底して言語に結びついているという認識がある。以下は、霜山(1999)によって記載された、そうした言語と生の不可分さを印象的に示す症例である(77頁以降)。30歳のその未婚の女性はある申し分ない会社員との結婚が纏まりかけていた。しかし、女性の母親がその結婚に反対しはじめたという。男が再婚であることや容姿の醜いことなど、いろいろの理由を口にするが、本当の理由は娘が結婚してしまうと自分の世話をしてくれる者がいなくなることにあった。その母親の猛烈の反対行動の結果、結婚の話は無くなった。そして、その女性は喉に違和感を覚えはじめ、また物も食べられない程なのであった。「……彼女の声はかすれ、母親や、ま

ならぬ世の中に、大きな声で『ノー』と言うことができなくなった。しかし、いまや、彼女の体が語りはじめ、このような彼女の生活自身を、『いやだ、いやだ』と絶叫しはじめたのである。彼女の嚥下困難も咽喉部の狭窄感も、まさに母親の要求を『のみこめない』ということにほかならない(78-9 頁)。なお霜山はさらに、この女性は結婚をめぐる問題以前から、自分自身の生の意味を肯定し自分自身を「飲み込む」ことができないでいたとしている(80-1 頁)。

疑いなく、言語は人間の実践的生活を部分的にはあれ反映している。だから、現存在分析は生活世界における全体的な人間に関心を持つ以上、われわれの生を映す言語に最大の注意を払わざるを得ない。個別事例を参照しながら取り出される精神病理学的な言説が普遍的であり得るとすれば、その普遍性は、同じく個性と普遍性を同時に孕む言語とどこか関連している、とは考えられないだろうか。これを論証するためには、「精神病理学と言語」という主題についてより仔細に検討する必要がある。ここでは G.ダンツェルと J.ラトナーによる「verrückt」(気の狂った; verrücken=「動かす」という動詞の過去分詞)というドイツ語への言及と、木村による「気」という日本語への言及を取り上げるに留める。「ずっと以前から、人は妄想病者のことを *verrückt* と呼んできた。こうした言語使用の内には、潜在意識的に、精神病者は世界における自分自身の場所を何らかの形で失ってしまっているという考えが含まれている」(Danzel and Rattner 2012, p.152; 強調は Danzel と Rattner)。また、木村(1975)はごくごく初期の論文にて、日本語の中で様々に使用される「気」を「身体の領域」でも「心の領域」でもない「第三の領域」、すなわち「その変化がただわれわれ自身の自覚を通すことによってしか判断されえないような、まさに病者の人間そのものの根源に繋がるような領域」として捉えた上で、統合失調症の病理をこの領域の問題として考える見方を提出している(129 頁)。気から、自分自身の場所から、すなわち自他のあいだの根拠から病者は動かされて(*verrückt*)しまっているという人間学的事態を、言葉は映し出している。

共通感覚

ここで共通感覚に関する精神病理学的研究を取り上げることで、人間学派の

精神病理学の実際を見てみることにしたい。共通感覚は古代ギリシアのアリストテレス以降、多くの哲学者によって固有の役割を与えられてきた。また常識や構想力との概念的繋がりも複雑であり、それ自体が極めて魅力的でありながら安易に哲学的に考察を加えにくい概念の典型例であると思われる。

一方、人間学的精神医学において、共通感覚は取り上げられることがしばしばであった。というのも、人間学派の伝統において、統合失調症がこの共通感覚＝常識の病理として位置づけられてきたからである。わが国の木村(1973)や独のブランケンブルク(1978)の研究がよく知られているが、最近ではイタリア精神病理学の泰斗 G.スタンゲリーニもまたアリストテレス哲学を軸とした共通感覚の精神病理学の単著を出版している(Stanghellini 2004)。

さて、精神病理学的な共通感覚論を概観するために、デンマークの現象学的精神病理学者 J.パルナスの記述した統合失調症の症例を(博士論文でも取り上げたが)一部抜粋して再引用する。

21歳の非熟練労働者であるロバートは、一年以上に渡って、世界から痛々しく切り離されたと感じており、また、一種の表現し難い内的な変化、通常の生活を送ることを彼に禁じてしまう内的な変化を感じていると訴えた。さらに彼は、自分から何かをしようとする気力と活力を失い、昼夜逆転した睡眠パターンの傾向に陥った。彼は、現実には居合わせていない或いは十分に生き生きとしていないという感覚、周囲との相互作用に参与していないという感覚に悩んでおり、その感覚は奇妙で、[経験のあらゆる局面に]極めて幅広く浸透しており、たいへん苦しいものであった。日常活動や日常生活に忙しく没頭するという意味では、彼は完全には世界に巻き込まれていなかった……彼の苦しみは次の叫びのうちに要約されている。「私の一人称的性格は失われ、三人称的視点によって置き換えられた」(彼は全く哲学に通じていない)。この証言をより具体的に例証するために、彼は、例えば音楽を自分のステレオで聴くと、音色がどういうわけか自然的な豊かさを欠いているという印象を持つと言った；「あたかも音それ自体がどこか具合が悪いようだ……」(Parnas 2000, pp. 124-5; 強調は Parnas; []は本林)

共通感覚の不全という文脈にて、重要となるのは第一に「世界から痛々しく切り離された」、「周囲との相互作用に参与していない」、「完全には世界に巻き込まれて」いないという訴え、第二に「私の一人称的性格は失われ、三人称的視点によって置き換えられた」という訴え、第三にステレオの「音色がどういっわけか自然的な豊かさを欠いている」という訴えである。それぞれが、自閉 autism, 自己-障害 self-disorders, 人間学的な味-障害 taste-disorders に相当する。さらにこれら三つの病態はそれぞれ、共通感覚が持つと考えられる、共同世界に波長を合わせる調律という機能、人間存在に根源的な自己性を付与する機能、情動的生活を可能たらしめる機能の不全として考えられる。自閉は共同世界からの切り離たれ、自己-障害は根源的自己性の損傷、味-障害は人間学的次元の美感的情動の減少(味気なさ)の謂いである³。

上の主張は主として木村の精神病理学を参照元としている。木村(2005a)は、「コモン・センス」は本来、共有された「知識」という意ではなく、「ある共同体の構成メンバーが共有する「間主体的世界との実践的な関わり」についての明文化しにくい根本的な「感覚」であったと言う(72-3頁)。つまり、コモン・センスは、第一義的には常識ではなく共通感覚であり、さらにこの共通感覚は共同世界と関わるためのある種の実践的能力である。さらに木村は共同世界の底にいわゆる前人称的な生命それ自体を見ている以上、彼の文脈において共通感覚は前人称的な大文字の〈生命〉との関わりを可能とする原理をも指すことになる。比喩的に言うと、共通感覚は個的生命による匿名的生命への波長合わせ(調律)に他ならない。われわれは共通感覚を通じて匿名的生命へと関わることで、他者と通じ合い、自己の自己性を確保し、情動的な生を送り得る、そういう発想を、彼の生命論的精神病理学の内に見ることができる。

ここで確認しておきたいのは、共通感覚という視点から上の症例を見ることで、三つの病態を一様の共通感覚の不全として把握し得るということである。しかし、勿論、課題は存在する⁴。例えば、統合失調症を共通感覚の不全とするならば、それを共通感覚の回復という論点へ展開することは可能だろうか⁵。すなわち人間学派は、その精緻化された精神病理学的研究を踏まえて、人間学的な心理療法論・治癒論を打ち出し得るのだろうか。それとも、人間学派は現存在分析として精神医学の基礎的な事象を扱う以上、やはり治癒や心理療法と

いう主題と結びつきづらいのだろうか。

心理療法

現象学者の村上(2011)は人間学派の研究が病理構造の解明に集中しており、治癒に関する研究が少ない現状を指摘し、臨床事例を参照しながら自ら治癒という現象の省察を試みている。ここで村上自身は治癒という現象の哲学的な本質を取り出そうとしている。

村上が行ったような治癒現象の哲学的考察に加えて、人間学派の見地から心理療法というプラクシスに根ざした議論もまた必要とされるだろう。私なりにこの点を最後に考えてみたい。人間学的心理療法論の草分けである霜山(1979)はある臨床心理学の教科書にて、自分は人間を生成発展的な存在として肯定的に捉える見方とは反対の立場にあると言う。「長い間の臨床の経験から次第に悟ってきたことは、人間というものは生成発展どころか、ゲープザッテルがいつているアンチエイドス、すなわち破壊的な消滅と崩壊に生来向っているもので、心理療法というものは、要するにそれを何とか食い止めようとする空しい、しかし必要な努力だということである。その意味ではS.フロイトのサナトロジーの新しい再形成が問題であると考えている」(279頁)。

霜山が言うような人間の否定的な破壊的傾向を真っ向から受け止めたのは、フロイトに加えて、フロイト以後のある学派すなわち対象関係論であろう。よく言われるように、M.クラインの対象関係論において、乳児の破壊衝動といった「否み」が起点となっている⁶。私は、これまで述べてきたような人間学派特有の志向・課題を認めた上で、尚、根本的な人間観における人間学派と対象関係論との実質的な差異は、その表面的な違いほどは決して大きくないと主張したい。また古典的な精神分析が神経症をその主な治療研究対象とするのに対して、対象関係論的な志向を持つ心理療法家は精神病水準の治療や研究をも遂行する。つまり学的対象においても、対象関係論は、統合失調症の病理を主な仕事としてきた人間学派と一致する。

精緻な精神病理学・哲学的考察を得意とする人間学派と、治療技法的な側面までも積極的に言及する対象関係論が相互補完的に交差する研究が可能である

とすれば、それは実りあるものとなるように思われるのだが、筆者にはまだそれを実現することが能わず、今後の課題として示唆するに留まる。

結論に代えて

霜山(2000)は『人間の限界』の冒頭箇所で、上でも取り上げた否定性に関して次のように言う。「……人間の限界というものは、いずこからかくる人間存在への「否み」なのだ」(102頁; ルビ略; 強調は霜山)。この書の最終部も引用する。「われわれは、おそかれ早かれ、終に空しくなるにしても、それが静かにひそやかに行なわれてこそ、われわれははじめて大地と和解して、地上の異邦人であることを止めるのである。そしてその後には、まさに生の死後とでもいうべき生がある。……この特別な生は、たしかに生物学的なものではないが、ひとつの生の継続であり、意味深いものであり、虚無でもなく、単調な灰色でもない。それは何らかの形で具象化するものではないが、すでにわれわれの存在の内に深く育まれ、われわれの存在の本質をつくりあげているものである」(237頁; ルビ略)。

ここまできて、私は本稿が前半で取り上げた木村の大文字の〈生命＝死〉という主題に再び帰ってきたように思う。霜山が言う人間の「否み」がそこから由来するところの死後の「いずこ」たる「特別な生」と、木村が言う個的生命がそこから生まれそこへ死んでいく「場所」としての大文字の〈生命〉——日本の人間学的精神病理学をそれぞれ精神医学者、臨床心理学者として違ったかたちで牽引してきた木村と霜山の両者が、それぞれの思索と臨床経験から、互いにどこか通じ合うような生命論的な見解を提出している事実を私はたいへん興味深く思う。

註

1. 木村は以下に要約的にまとめた「あいだ」に関して多くの著作で言及しているが、差し当たりは代表作である『あいだ』(ちくま学芸文庫)を参照。
2. まさにこの経験的次元と超越論的次元の「あいだ」は、彼が近年生命論的文脈で言及

する垂直の「あいだ」に対応する。木村との対話より、垂直の「あいだ」については、木村(2014)の190頁以下を参照。

3. 詳細は拙稿「共通感覚の現象学」を参照いただきたいが、私の主張は次に挙げる諸研究を主な拠り所としている。(1)自閉に関しては木村(2006)の現象学的直観診断を可能にする治療者の琴線と病者のそれとの共鳴不全に関する議論(263頁以下)やバルナスとボベの論考(Parnas and Bovet 1991), (2)自我障害に関してはサスとバルナスによる統合失調症者においてイプセイティ ipseity という根源的己の乱れ disturbance を見る研究(Sass and Parnas 2003), (3)味-障害に関しては霜山(2001)による味についての人間学的論考(139頁以下)や無情態性 Unbefindlichkeit に関する人間学的研究(ビンスワンガー 1990)などである。特に人間学的次元での味-障害に関しては、木村(2006)が Unbefindlichkeit を「味気なさ」と補足していることから着想が得られた(284頁)。
4. 例えば、共通感覚という第六感は超越論的な機能なのか、それとも経験的な機能なのだろうか。もし超越論的な機能であるならば、それは経験的事象としての病によって損なわれることなどあり得ないという先述の批判がここにも当てはまる。ただし、共通感覚もまた単に超越論的次元か経験的次元かのいずれかに還元され得ないような、まさに両者の「あいだ」(木村敏)の次元の事柄なのであろう。
5. 岡本(2003)は共通感覚の回復を取り上げた数少ない文献である。
6. 対象関係論には大きく分けて独立学派とクライン派があるが、ここで念頭に置かれているのはクライン派である。というのも、心理臨床家の祖父江(2008)が指摘するように、独立学派と比して、「クラインは人間の「破壊性」を本性上避けられないものと考え、「死の本能」の投影としての迫害不安から自己の破壊性の認識による「償い」へという成長過程を描き出した」からである(35頁)。

文献・付記

本稿は、哲学若手研究者フォーラム(2015年7月11, 12日・国立オリンピック記念青少年総合センター)で行った発表「人間学的精神病理学——そのヴァリエティと共通立脚点」に基づくが、議論の一部は変更されている。

ビンスワンガー, L. 『妄想』, 宮本忠雄・関忠盛共訳, みすず書房, 1990年。

ビンスワンガー, L. 『思い上がり ひねくれ わざとらしさ——失敗した現存在の三形態』, 宮本忠雄監訳, みすず書房, 1995年。

ブランケンブルク, W. 『自明性の喪失——分裂病の現象学』, 木村敏・岡本進・島弘嗣訳, みすず書房, 1978年。

Danzer, Gerhard and Josef Rattner. *Der Mensch zwischen Gesundheit und Krankheit*, Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 2012 (originally published in 1999).

加藤敏「解説——新世紀の科学知と霜山人間学」, 下記の霜山(2001)所収, 255-262

頁.

木村敏『異常の構造』, 講談社現代新書, 1973年.

木村敏『分裂病の現象学』, 弘文堂, 1975年.

木村敏『あいだ』, ちくま学芸文庫, 2005a年.

木村敏『関係としての自己』, みすず書房, 2005b年.

木村敏「ハイデッガーと精神医学——分裂病問題を軸として」『自分ということ』, ちくま学芸文庫, 2008年, 200-217頁.

木村敏『自己・あいだ・時間 現象学的精神病理学』, ちくま学芸文庫, 2006年.

木村敏『あいだと生命——臨床哲学論文集』, 創元社, 2014年.

松尾正『存在と他者』, 金剛出版, 1997年.

本林良章「共通感覚の現象学」, 博士学位論文, 神戸大学, 2014年
(<http://www.lib.kobe-u.ac.jp/repository/thesis2/d1/D1006015.pdf>).

村上靖彦『治癒の現象学』, 講談社選書メチエ, 2011年.

岡本慶子「統合失調症における共通感覚の回復について: 友人関係「たわむれあい」を通して」, 精神神経学雑誌, 105(9), 2003年, 1186-1205頁.

Parnas Josef. “The Self and Intentionality in the Pre-Psychotic Stages of Schizophrenia: A Phenomenological Study.” In Dan Zahavi (ed.), *Exploring the Self: Philosophical and psychopathological perspectives on self-experience*, Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company, 2000, pp. 115-147.

Parnas, Josef and Pierre Bovet. “Autism in Schizophrenia Revisited.” *Comprehensive Psychiatry*, 32(1), 1991, pp. 7-21.

Sass, Louis A. and Josef Parnas. “Schizophrenia, Consciousness and the Self.” *Schizophrenia Bulletin*, 29(3), 2003, pp. 427-444.

霜山徳爾「私の人間観と臨床(I)」, 『臨床心理学の基礎知識』(新装版), 佐治守夫・水島恵一編集代表, 有斐閣ブックス, 1979年, 227-279頁.

霜山徳爾『明日が信じられない』(霜山徳爾著作集1), 学樹書院, 1999年.

霜山徳爾『天才と狂気——人間の限界』(霜山徳爾著作集2), 学樹書院, 2000年.

霜山徳爾『現存在分析と現象学』(霜山徳爾著作集3), 学樹書院, 2001年.

祖父江典人『対象関係論の実践——心理療法に開かれた地平』, 新曜社, 2008年.

総田純次『精神病理学の認識論的基礎——解釈学的立場からのアプローチ——』, 晃洋書房, 2003年.

Stanghellini, Giovanni. *Disembodied Spirits and Deanimated Bodies: The Psychopathology of Common Sense*, Oxford: Oxford University Press, 2004.

谷徹「「あいだ」と「二」」, 木村敏・野家啓一監修『臨床哲学とは何か——臨床哲学の諸相』, 河合文化教育研究所, 2015年, 207-227頁.